

各関係機関長 様

佐賀県農業技術防除センター所長



キュウリ黄化えそ病

キュウリのウイルス病の発生を防ぐため 改植時に施設密閉処理を実施しましょう

本年、アザミウマ類が媒介するキュウリ黄化えそ病が多発生し、大きな被害を受けた圃場がありました。また、タバココナジラミが媒介するキュウリ退緑黄化病は、依然として県内で発生しています。次作での、これらウイルス病の発生を抑えるためには、改植時に媒介虫を死滅させる必要があります。

つきましては、下記事項を参考とし、改植時に薬剤を用いた残渣処理および施設密閉処理を徹底するよう生産者への指導をお願いします。

記

1. 現在の状況および今後の発生予想

平成30年10月22~24日にキュウリ6圃場を調査した結果、黄化えそ病の発生は6圃場中2圃場で見られ、発生株率が75%と高い圃場があった。また、本年8~10月に当センターへ依頼された診断において、7圃場で黄化えそ病の発生を確認した。

今後の、アザミウマ類の発生は平年および前年より多いと予想している(図1)。保毒虫が圃場内に残ると、次作において黄化えそ病が早い時期から発生し、被害を受ける恐れがある。

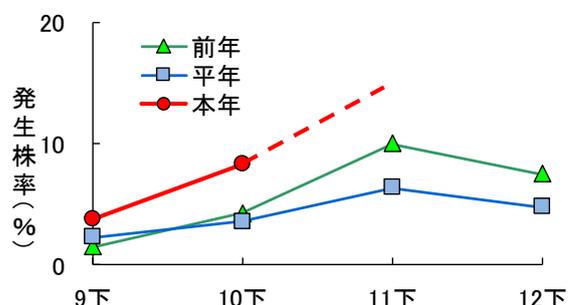


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

2. 今後の防除対策

- (1) 栽培終了時まで、アザミウマ類に対する薬剤防除を実施し、施設内の害虫密度を低くする。
- (2) 次作への伝染源を断つため、ウイルス病罹病株を確実に枯死させ、施設内に残ったアザミウマ類の確実な死滅を図るよう、キルパー液剤を利用した施設の密閉処理(古株枯死)を必ず行う。なお、施設の密閉処理のみの場合、ミナミキロアザミウマが長期間発生し、十分な効果を得にくい(参考資料 表1の無処理)。

冬季における改植時の施設密閉処理（古株枯死）の例

キルパー

処理日からの日数

1. 施設内の雑草は除去しておく。

処理-2日目

2. 灌水を止める

（目安）2～3日

↓
 土壤水分を適湿（土壤を軽く握って放すと割れ目が出来る程度）にするため。

キルパー

処理日

3. 灌水チューブを利用して、キルパー処理して枯らす。

※植物は株元から切らない状態でキルパー処理を行う。

使用方法：畝マルチ内に設置されている灌水チューブからキルパー（原液として40～60L/10a）希釈液（50～100倍程度）を施用する。

↓

例）原液40L/10aを50倍で処理する場合（全量2,000L/10a処理する場合）
 原液40Lを1,500Lの水に希釈し、灌水チューブに流す。
 水500Lで灌水チューブ内を洗浄しながら、洗液を流す。
 （※灌水チューブに薬液が残らないように注意する）

4. 施設を密閉する。

（冬季の目安）10日程度

↓
 被覆内のMITCガス濃度が下がるのに10日程度かかる。

キュウリは枯死し、土中のミナミキイロアザミウマ蛹は死滅する。

処理10日目以降

5. 植物が完全に枯れたのを確認し、残渣を持ち出す。

↓



キュウリが枯死した様子

6. マルチ除去、耕耘し、ガス抜きを行う

↓

※耕耘時、目にしみる感覚がある場合は、再度耕耘しガス抜きをする。

処理30日目以降

7. 次作定植準備（畝たて、施肥等）に入る

【参考データ】

表1 キルパー液剤処理後のミナミキイロアザミウマ羽化成虫発生数

	処理前 (12月25日)	10日後 (1月4日)	15日後 (1月9日)	21日後 (1月15日)	27日後 (1月21日)	31日後 (1月25日)
キルパー液剤区	32.4	0	0	0	0	0
無処理区	27.9	2	15	4	1	0

※処理前は10葉あたりの成幼虫数、処理後は苗3株の成虫合計数

キルパー処理区は、12月25日にキルパー50倍希釈液100Lおよび水50Lをマルチ内の灌水チューブを通じて土壤散布し、ハウスを密閉した。処理10日後の1月4日にハウス開口部を開け、キュウリ残渣を搬出した。無処理区は、12月25日にキュウリ株を抜根して密閉し、株が枯死した12月29日にキュウリ残渣を搬出した。1月4日以降数日間隔で、本葉3～4葉のキュウリ苗3鉢を、それぞれのハウスに日中のみ(9:00～15:00)設置し、苗へのミナミキイロアザミウマ成虫の寄生虫数を調査した。

(埼玉農総研, 2014)

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5042